

タイトル：2021年度研究セミナー（第22回）

日時：2021年12月17日（金）～18日（土）

オンライン開催

「(仮) パレスチナ刺繍がパレスチナの農村女性・難民女性の自立化に果たす役割」

山本真希（東京農工大学 博士課程）

私はパレスチナ自治区に住む女性たちと共に、パレスチナ刺繍で帯をつくる活動をしている。パレスチナ女性たちと共により良いモノづくりをし、彼女たちの収入をあげていくためにはどうすればよいのだろうか？常々思っている。パレスチナ刺繍については、過去に関する文献はあるのだが、現状についての文献はとても少ない。それならば自ら研究調査をして記録として残そうと思い立った。大学院修士課程を卒業し20年近くたったのだが、新たにご縁のできた大学の先生の元に博士課程の学生として入学した。周りからはわざわざ大学に入らなくても・・・という声もあった。私の学歴上のバックグラウンドは薬学士、医科学修士であり、卒業後は化粧品メーカーで研究員をしていた。理科系においては「仮説をたてる→仮説を証明するための実験計画→実験をする→結果の考察→・・・という流れで研究をしていた。しかし、パレスチナ刺繍に関しては、どのようなアプローチをして、どのように分析すれば「学術的で有意義な情報」として記録に残すことができるのか、全く見当がつかない。論理だって調査し、その結果をまとめて発表し、記録として残す。そのためには大学に入って専門家に指導いただく必要があった。入学してから1年ほどたち、所属している大学や学会（農学関係テーマが多い）での発表のほかに、他機関でのセミナーも参加したいと思っている頃に本セミナーの開催を知り、指導教官に伝えて応募した。

本セミナーでは一人あたり発表1時間、質疑応答1時間と、先生方からじっくりとアドバイス・ご指導いただけたことは、とても勉強になり有意義な時間であった。他の発表者のテーマやその発表方法もとても興味深く、参考になった。これまで理系分野での学会ではプレゼンテーションはパワーポイントで要点を簡潔に表・グラフ・写真で表すという手法だった。本セミナーでの他の発表者によるワードを用いた「文章による細かな表現」による発表により、言葉の言い回しや表現法の重要性を実感した。セミナーの雰囲気は想像していたより和やかであった。他の発表者の生計をたてるために必ず学位を取得しなければならない、といったアカデミアで生きていくための覚悟の話や、長い年月をかけて学位をとった先生の情熱と粘り強さにも感銘をうけた。自身の都合により懇親会に参加できなかったことは残念で、機会があったら先生方の研究における経験談なども拝聴させていただきたい。未だ新型コロナウイルス感染症の蔓延のため現地の訪問調査ができないのだが、調査対象者のオンラインインタビューを検討している。インタビューのコツや注意点などについてのセミナーなどもあったら参加したい。

セミナーの形式だが、感染症の状況がゆるせば対面型・オンライン型いずれかを選択でき

ると有難い。遠方の参加者にとってオンライン参加が可能なのは利点である。個人的には、できることならば先生方・他の発表者と直接お目にかかり、同じ空間を共有したかった。最後に、他大学の学生も参加できる貴重な機会を与えてくださった AA 研の先生方と事務局に御礼を申し上げたい。